

令和5年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢中央高等学校昼間制

重点目標		具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判定基準	評価	データ	分析と評価
1	生徒の実情に応じた学び直しによる基礎学力の定着を確かなものとするとともに、ICT活用、アクティブラーニング、ユニバーサルデザイン化等を推進することで学力向上を図る。	○教職員が、1人1台の端末を有効に活用した指導を行い、生徒個々の興味・関心を高め、学力向上を図る。	教務課	【成果指標】 ・生徒用端末を授業で活用したことのある教員数が増加している。 ・学校評価アンケートで調査を実施	○生徒用端末を授業で活用したことのある教職員数が全授業担当者を分母として A 75%以上である。 B 70%以上75%未満である。 C 65%以上70%未満である。 D 65%未満である。	B	71%	前年度の同時期のデータ69%からほぼ横ばいの結果となっている。生徒用1人1台端末の整備が完了しているが、3割弱の教職員が、授業時での活用に取り組みていないことは課題である。今後は研修や相互研鑽などを通じて、活用の促進を図りたい。
		○教職員が、学習習慣を定着させる指導及び、授業の出席を促す指導を徹底し、生徒の授業に取り組む意識を向上させる。	生徒指導課	【成果指標】 ・授業の出席を促す指導の対象生徒数が減少している。	○授業出席を促す指導の対象生徒数が A 10名以下である。 B 11名以上25名以下である。 C 26名以上35名以下である。 D 36名以上である。	B	17名 昨年度は12名	近年、対象生徒は15名から20名程度で推移しているが、今年度は、特に1年生と転編入生を中心として、学校生活が落ち着くまでに長くかかり、総数の17名のうち、前期に12名が対象となっている。引き続き、授業への出席ルール順守等の指導を継続したい。
学校関係者評価委員会の詳細			・生徒の授業評価について、前期から後期にかけて肯定的な回答が増えており、多様な生徒がいるなかでの指導について、教員の意思統一がなされていると感じる。 ・生徒用端末の活用が進んでいるが、授業であまり使用されない先生も一定数おられるようである。教科指導の成果があがるよう、個々に応じた様々な工夫をお願いしたい。					
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策			・可能なかぎり、生徒との信頼関係を高め、「個」を大切にした指導を継続していきたい。 ・授業中の生徒への声かけ等を徹底するとともに、修得技術に応じた効果的な端末操作やアプリ使用に関する校内研修を行いたい。					
2	卒業までを見通したキャリア教育に組織的に取り組み、生徒の希望進路を実現する。	○卒業生全員の進路実現のため、「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「LH」等の授業の中で、コミュニケーション能力、思考力・判断力の育成を図る。	進路課 学年	【成果指標】 ・年度末には全卒業生の進路先が内定している。	○年度末における全卒業生の進路内定率が A 95%以上である。 B 85%以上95%未満である。 C 80%以上85%未満である。 D 80%未満である。	A	97% 進学 22/23 就職 18/18	進学未決定者の1名は、次年度再挑戦の予定。就職希望者は皆、内定をいただいた。進学・就職ともに、早い段階から意識を高め取り組んだ生徒は着実に結果を残している。特に進学では、高い目標を掲げ努力を積み重ねる生徒がより見られるようになっている。
		○生徒が、進路の目標をできるだけ早い時期に設定できるようにキャリア教育を進め、望ましい職業観と社会性の育成を図る。 ○年度末に卒業予定の生徒が、遅くとも6月には進路目標を持てるように指導する。また、6月に進路目標を持てなかった生徒には継続的に指導する。	進路課 学年	【成果指標】 ・年度末に卒業予定の生徒が、進路目標を持っている。	○年度末に卒業予定の生徒で、進路目標を持つものの割合が A 90%以上である。 B 75%以上90%未満である。 C 70%以上75%未満である。 D 70%未満である。	B	87% 卒業予定者56名 進学 23名 就職 18名 アルバイト等8名 未定 7名	進路未定者数が減った分、アルバイトの継続や卒業のみとなる生徒が増加している。個々の精神的な負担や家庭の状況等がこの要因となっているが、今一度教員間でキャリア教育の本質に立ち返り、将来にわたって必要となる力をどのように身に付けさせるのかを検討するとともに、引き続き、粘り強くその指導に当たっていききたい。
学校関係者評価委員会の詳細			・進路実現に関する評価項目は、「○○に○人が希望している」など、出口等の数値にこだわったものとなるのは理解できる。しかしながら、本校の実情を鑑み、「この学校で自分の進むべき道を見つけられた。」等、生徒の心の成長に関するようなものも指標にはできないだろうか。 ・卒業式などに参加して、小中学校時に不登校であった生徒が登校できるようになっている現実に感銘を受けた。残念ながら、進学や就職につながらなかった生徒もいるが、個々に応じた進路指導がなされたものと感じる。					
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策			・本校はキャリア教育関係の計画が各学年団に任される傾向があるため、進路指導課主導でこれらの計画を整理し、高校生活を通してより効果があがるようなものに再構築していきたい。 ・いただいた評価を糧とし、今後も「個」を大切にし、可能な限り生徒ひとりひとりに対応するとともに、各指導の改善を図っていききたい。					
3	規範意識の育成、教育支援の充実、外部機関との連携により安心安全な学校づくりを推進する。	○教職員は、広報活動をより充実させるため、ホームページによる情報発信に取り組み、保護者や地域に開かれた学校づくりを推進する。これにより、保護者に学校の様子を把握してもらう。	総務課	【成果指標】 ・保護者が学年別保護者説明会、保護者懇談会に少なくとも1回は出席している。	○学年別保護者説明会、保護者懇談会に1回は参加した保護者の割合が A 85%以上である。 B 75%以上85%未満である。 C 65%以上75%未満である。 D 65%未満である。	A	130% (のべ参加者数より算出) 生徒 340名 1年 204 2年 93 3年 99 4年 46 合計 442(のべ)	コロナ禍のため、過去2年間は保護者が校内に入る機会がほとんどなかった。この影響もあり、保護者会には過去に比べて大変多くの参加があった。また、担任との積極的な面談も行われた。今後の情報発信の仕方やその内容を工夫改善することで、さらに保護者の学校への関心を高め、家庭と連携した生徒指導をすすめることができると考えている。
		○教職員は、「どの生徒も、いじめの被害者にも加害者にもなりうる」という基本認識を十分にふまえた指導を行う。本校の「いじめ防止基本方針」に基づく取組みを確実に実施することで、いじめの発生を防ぐ。	生徒指導課	【成果指標】 ・いじめが発生しない。	○いじめの発生件数が A 重大事案が0件かつ認知件数が0件である。 B 重大事案が0件かつ認知件数が5件以下である C 重大事案が0件かつ認知件数が6件以上10件以下である。 D 重大事案が1件以上または認知件数が11件以上である	B	重大事案 0件 認知件数 1件	今年度のいじめの認知件数は生徒の母親からの連絡による1件で、現在対応中である。他にもいじめにつながるような小さな事案は散見されており、今後も生徒がSOSを出しやすい環境をつくるとともに、担任、各課、外部機関等と連携しながら、生徒たちを見守っていききたい。
		○健康診断や個別の指導を通じて、生徒の歯・口の健康づくりに重点的に取り組む。	保健課	【成果指標】 ・歯科検診で受診勧告された生徒が受診している。	○歯科検診後に受診勧告された生徒のうち、受診した生徒が A 40%以上である。 B 30%以上40%未満である。 C 20%以上30%未満である。 D 20%未満である。	C	27.3% 受診勧告172名 受診報告47名	受診報告があったのは47名であった。受診勧告書は2度配付し、う歯の多い生徒や前年度から未受診の生徒には個別指導を実施した結果である。個別指導対象者の中には現在受診中の生徒もあり、生徒の実情の応じた個別指導を今後も継続していきたい。
		○効果的な支援を実践するために、学年会、養護教諭、外部機関等との連携による組織的支援体制を整備し、対象生徒を適時に支援する。	保健課 相談室	【努力指標】 ・教職員が個別の教育支援計画を作成することができる。	○個別の教育支援計画について、生徒に合った具体的な目標を立てることができると自己評価した教職員の割合が、 A 90%以上である。 B 80%以上90%未満である。 C 70%以上80%未満である。 D 70%未満である。	A	94.4% 教職員37名 できる 19.4% まあまあできる 75.0%	個別の教育支援計画作成会や情報交換会を通し、生徒ひとり一人について考える機会を設けたことや、特別支援コーディネーターが複数配置となり、個別の教育支援計画の作成時に具体的なアドバイスを行えるようになったことなどが、評価に大きく影響したものと考えている。
学校関係者評価委員会の詳細			・個々の生徒の状況に真摯に向かい合おうとしている学校の姿勢は強く感じられる。大変であると思うが、今後も粘り強く指導を続けていただきたい。 ・いじめに関する小さな事案を積極的に認知しようとしている学校側の取組も評価できる。					
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策			・「生徒との信頼関係失くして指導無し」と考えている。まず最初に、先生方が生徒との信頼関係構築に力を注いでいくことを徹底したい。 ・保護者会等と連携することで、学校の取組についてできうる限り広報し、協力・理解を求めている。					

4	スポーツ活動や文化活動、ボランティア活動等とおして自主・自律・助け合いの精神を備えた活力ある生徒を育成する。	○部活動紹介や一斉活動日を通じて、生徒に活動内容を具体的に伝え、積極的な参加を呼びかける。	生徒会課	【成果指標】 ・生徒が部活動に加入している。	○部活動に加入している生徒の割合が A 45%以上である。 B 35%以上45%未満である。 C 30%以上35%未満である。 D 30%未満である。	B	43.6% 運動部80名 男子52名、女子28名 文化部63名 男子36名、女子27名	部活動参加生徒の割合は5月31.1%(109名)10月38.8%(120名)12月43.6%(143名)と徐々に増加がみられた。運動部全体で83名から80名(男子49→52、女子34→28)55.9%文化部全体で37名から63名(男子18→36、女子19→27)44.1%学校行事も再開され、徐々に増加がみられた。なお、昨年度は38.8%(120名)である。
		○オリエンテーションや全校集会時に、生徒会活動や学校行事等について、分かりやすく説明し、興味・関心を持たせ、主体的な参加を促す。	生徒会課	【満足度指標】 ・生徒が、生徒会活動や学校行事に満足している。	○生徒会活動・学校行事に対する生徒の満足度が A 80%以上である。 B 70%以上80%未満である。 C 60%以上70%未満である。 D 60%未満である。	B	78.0% 体育祭74.8% 文化祭82.3%	教職員アンケート調査の「生徒会行事に積極的に取り組ませている」は、前期84%、後期86%となり、先生方の指導のたまものである。コロナ禍での制限も解かれ、様々な学校行事を対面で実施する事ができた。文化祭では、一部模擬店も復活できた。
学校関係者評価委員会の詳細				・生徒の各活動の様子を見て、学校の活力、多様性を大切にしていることなどを感じることができた。 ・本校に入学して自分の好きなことに打ち込み、救われて不登校を克服できた生徒がたくさんいると思う。この学校の存在が大変にありがたい。 ・ボランティア活動やアルバイト等にも積極的に取り組ませてもらいたい。様々な活動のなかで、生徒の社会性や社会における経験値などを向上させていっていただきたい。				
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策				・今後も体験的な活動である部活動や学校行事等を通して、生徒の社会性や学校生活への満足感や自己肯定感等を高めていきたい。				
5	発達障害による困難さを抱える生徒を対象に、通級指導などによる自立活動を通して、自尊感情を高めるとともに、障害の改善または克服を目指す。	○通級指導を担当する教職員や外部講師等から自立活動の指導法や支援について学ぶ。これを生かし、発達障害のある生徒が学習上・生活上の困難さを改善克服できるよう取り組む。	通級指導推進	【成果指標】 ・教職員が、発達障害のある生徒への具体的な支援の場面をもつことができている。	○発達障害のある生徒への具体的な支援の場面をもつことができたとする教職員の割合が A 85%以上である。 B 75%以上85%未満である。 C 60%以上75%未満である。 D 60%未満である。	A	88.9% 教職員37名 できた 33.3% まあまあできた 55.6%	前期（87.2%）よりも若干、肯定的な回答が増加した。個別の教育支援計画の情報交換会や授業担当者と担任や関係職員との情報交換等で具体的な支援方法の情報交換が行われたためと考えられる。
学校関係者評価委員会の詳細				・本校に入学する生徒には、自分でSOSを出せない者が多く、また「宿題ができなかったから学校に行ってはならない。」のような間違った判断をする者も多い。周囲にきちんとSOSを発信できる生徒の育成をお願いしたい。また、先生方にもそのような状況にいち早く気付けるようなスキルを身に付けていただけるようお願いしたい。				
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策				・通級指導のみならず、今後も多様な生徒に対して、登校時や授業時の声掛けなどの、信頼関係を築くための小さな積み重ねや情報共有を大切に行っていきたい。				
6	効率的かつ効果的な業務遂行のため、組織的な業務改善に努める。	○教材を共有したり、ICT機器を用いたりするなどして、業務改善を推進する。特に、メールや校内掲示板等を利用することで、紙文書の使用が縮減されるようにも取り組む。 ○定時退庁日の提示等により、勤務時間を意識した働き方を浸透させる。	教頭	【努力指標】 ・教職員がICT機器等を用いて、業務改善につながる工夫をしている。	○ICT機器等を用いて、業務改善につながる工夫をすることができたとして自己評価した教職員が、 A 80%以上である。 B 70%以上80%未満である。 C 60%以上70%未満である。 D 60%未満である。	A	83.3% できた 41.7% まあまあできた 41.7%	今年度、欠席連絡や授業アンケート実施などが電子化され教員の日常的な校務におけるICT化は推進されてきている。今後も、ICT機器等を用いた業務改善が一部の教員に留まらないよう留意して、時間外勤務時間の減少につなげたい。
学校関係者評価委員会の詳細				・アンケート等の設問において、誰が主語になるのかがわかりにくい表現のものがある。また、結果をまとめた資料等では、夜間制と昼間制で書式が統一されていないものもある。ICT機器の活用は歓迎されるべきことであるが、保護者目線にたった改善も行っていたらけるとありがたい。				
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策				・アンケート内容の改善及び結果資料の昼夜での書式の統一を図り、よりわかりやすい資料づくり、結果の公表等につなげたい。				